大和小学校倫

明倫第二

倫は叙ありてよりは訓
とゐて叙忘ハ義ととてをぐ支
ハ信ととて仁づる人倫とゐ
の天性まこゝろなり又天叙とも
天倫ともいふみちをいふ
ひと倫ありおいてのくらゐ多ふをこゝ
とゐふゐふへいふ天学とたゝしみおこれとを
一番ゐらんそゝりこそ

△父母いわまをそでやなひそてなまへそ
これで天下ふわしさ父母のこころが安心
おどうれてござんあるひなそろそかろそ
めのまうそそ弁こあく私ばさうに関下うけ
れり母うくべ親とうすることも出まのハわが
かろことわこまうもれる人だうや大家を
なくこくるの小絶女のまうびもを失母弟をご
つまあ旨とめくこてもろさんこ勢しますなくな
生でこやかくのれ衣ろんおうくさはもやこそ
となくつるよ父母ろうそびとをもたまうふとや

○樹木ぐるんとすまで風やまびまあ
ろんとす狩ご親まこごと江言よがいふげふ
さはこととなるく人のいおらを中わくきあ
ろうぐまうもねぐ去ぐくそれ
しのハ父母こく年ぐ名年一則吹春一則
沢櫛とふるかく文ありがくえ行ふ
○衣子毛旬と法旨ろ
ちの日のれほうごやそれをれこの
とはものぐことをそそなれ
○まうてハ私くよ親をうぐむることは

とめとてくちぐちとぶらひ
ふまひありともそれをうけ
給へば法心やをうわとぞ
○父母よさうひろんとあるは
て乳とやうくはしかゞ
こゝにてふとといて行きみ
○そらごとをしいのられまと
乃ちは神もあらんとう
にわ〳〵孫どもをたもち
ふ後ちよはどひわる式を
ひま

かとうまこゝろまことそのみふ
とんとをば男もまりもと
○業平朝臣の母のうた
○
老ぬまたさわ
いよくみまくほしさそれ
西ー
世の中よたわわの秋のなくもれ
ちようといのち
○小式部内侍
いくたもゆくまをわるをと

おやよさうにおもひてとまり初め
とうかんとそそそ泊まりにくれば和歌山部
このまてたちもあらゆくらの森にそこ
見ちもあらねとそうちよう
とく先とそそて帰らあそれとたりみん
みやまさりのみんみはまさりそう
○長川のとをつつこと病たもくめくとかう
ふりわらうやおこせ　狭人もこん
いくたなすあそくるひん
新りそれみてその家

西一
やまとういあれ
ひとりや苦の
○身の父母をこ
我かごもれ
やきてのこを
○若子(わくご)は統(すべ)よ
分とまてたなてるそのたりらこと
と戦(せんそう)に統(とう)そうこあらものぞひごくう
とそ水とむごし今にてうこひやず

こと能はざるなり

○曾子いはく慎み終り遠きを追へば民の徳厚きに帰す

曾子のいはくやーなひとゝなりて父母の喪に居ては哀を尽すことを務めとし祭祀には敬を尽すことを務めとすべしとやーなふ人ものゝ死して後ろ遠き祖先までも忘れずして慎みおそれ祭祀を絶やさゞれば民の徳厚きに帰すとやーなふことなり

こゝでたゞもくさつかたづけん

○昔の君の治め給ひし義の約束を孔子のこの言葉にてみよとなふ人の事をとりて善悪をたゞしてあらためられをとゝのへととのへてあるもあれをようこゝろえてつゝしみおそれてあらざるべからずとなり

○三年の喪ハ天下共に用ゆる喪なり孔子のみをこゝろの事我子を朝にて

やまんといふ隣の父母の喪を百官のかわやとこれの事の時は仮にのがれ入て喪ふの事ほ

權とありわ許り先生の家ほ圖とりらひごう
に化すうものまづ一二人ありき妻まの家祖
おて驛すうものまの他鶯山儀節とりてこ卿未
俗かいうとや禮義我ハ人心の固有朱みされうこまを
しかも家礼とものひりの物ごと胡敬齋こう
朝鮮乃金自浦ほとたいふとうるひ母妻よで
とりらひごとひとへよ家禮よりまる父とうて合せ
たうふりおりほ六年一墓ら起こ二就ておて
六年墓ら席ひとへよ家祖を風ふてそ墓山乃
おて姐妻のほうびりまに雖有文母の妻。祖と

ふりける卿中親戚喪をとり収ようすめられどもこと
もさうびて喪毀しやまひとつこ孫ほ母を
まつること我いける時乃ごとにし我を母乃ごとにはう
ふまてこ妻まの中ふりまるそ乃のごとして面
雪あれうもこをうびとりん李朝神武天皇前
びおて二年位ほ緩結天皇前ふりくて妻
葬まのもを行くりるひ天子崩御あれば一
年我ハ一月ほ欽明天皇乃御
時よ佛法ほこうこそ神乃潮たころふりさ文武
天皇乃時よ火葬ふりまそ今のむてごうそく

なりぬをいかゞ家禍よろこびめでて喪祭をつとめをこなふべき人出來よけまたばせ侘ひつぶりのまゝにて獨なるを

○衣衾棺槨必誠必信

つゝしみて物おくりまうれとふかくつゝしみて實入たる松の葉をもてうづまきこめよとなり

○親の佛法はなまぐさものかゞや蕎麥やみかやなどをそなへまつるべきにあらず

○親の佛法はなまぐさものかゞや蕎麥やみかやなどをそなへまつるべきにあらず

○衣衾棺槨必誠必信

つゝしみて物おくりまうれとふかくつゝしみて實入たる松の葉をもてうづまきこめよとなり

びらと申儀或問よつてくそれわろき儀なりと

やくわうきまうべきにあらず

○親の佛法はなまぐさものかゞや蕎麥やみかや

禮のごとくすまもつゞかぬ事なれどもとゝぞれなるべきなり其時

主ゆゑまふもとこと葉をつくしてるにさゝ

ばそのあとびしいとでもけざりん或いさゝか

てゝとゝがさゝ或いまれをこうりてをる

ゝ或いまれてにまでひて親入おほよさゝり

わろとなおそふよおもばゞ不義よあらんとび

主君のおさつまでていみじく文にあそべ
ふかき文おほく一ぺ事死のをしへをまもるべし
年ごのみづからおくなむもつことあるべからず
べしとそへる年久しくなひわせ給ふべし
○神主式みな陰陽の数あせりこれ律令礼
楽の具ありと朱子も歎ぜられしとぞ
かるべしまよりてまもるべし
○事死如事生とたゞ今まで
つものをこるべしこれで冬寒い親を温めひ
しとらひあれの格まで酒茶の外

主君のごとくすべし我が家礼をもとのごとく
に親乃ともまりあそびつゝ酒をもらひ飲
のおよてまもとをれ祥の格まで朱子
ふ年ごとうつもの
とりつゝ猿山儀節あるいは
つまでよく古礼とかんがへそのことをよくて
ようをとこのまゝなるべし
○簡易簡いかの人も学ぶに困るうつくしの
るゆゑにそのうちまつりにこれ今並ぶ
笑ようへ考慎と処閑ようへ精錬と節一年にこれ

もまうす事生涯のことにて
あるさがとつて朱子(しゅし)の綱鑑(こうかん)擁書(ようしょ)倭訓(わくん)栞(しおり)などを
とりもちてうをおもつてよろこびくらしおるべし
○冠乃(かんむり)まうし仲月(ちゅうげつ)よりこの小冠日八世俗のまや
うなることのよろこびのつとめもやうやうきとしの
て毎月をおいてつづけ二月ころを小祥(しょう)といひ
八礼よろこび親族(しんぞく)一同ころ大祥(だいしょう)といひこれ
おくべし礼(れい)三日と忌月(きづき)身(み)の喪(も)といつてもこと
といいことかあるべきまつたく今の人祥月(しょうつき)に

毎月(まいつき)だらく魚(うお)をまねぐらをそのまゝにて
とのことたらーとわそぶまつてもよろこびくらし
(ごとく)のもつてのほかなり
○礼(れい)ころ白不楽(ふがく)といひおるゆへ(ゆえ)なり
ざなぎ今の人奥(おく)よりおそくまでおきて
ふくせ(せん)多(た)をいとなむことひまおるゆへ
ふことをさまつげ礼(れい)をまつざるなりと
礼(れい)ハ万(よろず)えたりと何(なに)の人(ひと)も奥(おく)よりおけるや
との人奥(おく)にもぐり起(おき)

どをもてきそひてをやしむるの祝飲
明が三日をかくしつゝあそびくらせるまゝ
あるのまたう
○年ごとの事ハかくの書ふみ一日半の旧記
にて万ぐでたづさ二年忌ハ國俗よ出ることゝ
ナニ支をつりてはじまるゆゑ先支をむかへて
ひまつふつさうをりおろまゐりかゝは師よ
さまゝくてどもるひナ七念又ハ三又ナ百日
忌なゝひたるこゝとをくびもりことするの
ふゝのまゝくびてさふくるまゝ

○家礼ハ祢疫りてふ日とうるふ祢疫ハ
ぐりはゝ也或ハ生れて六ヶ月ゝ或ハ生れて
或ハ行の松をりてすくなくさ乃ぐくなるゆゑ
遠也神ハ告ぶたまふ和りハ竹箒ともいふ箒ま
箒ゝ素ぐりはゝ也猶略よんでこゝ日本の神ぶ
に和ハ風乃あるやうよの和ハ竹箒ゝ玉ふ
瀛奎律髄よ魏仲先ぶ
明乃ゝ祖ゝやりゝ明神
の吉凶をうらなふ仏寿代よくおいる事能ゝ

孫よおそう孤樹寝疾みる明日までも生命ぶ
それまでを珍重ーて生のえでめにのせそう
○へみへ〳〵善悪はてはそれをもれそう人もまれるゆゑ
官たどそれをもれそう人もまれるゆゑ
みて俗と同愛えいうを用られて易象範
教を遵ーてうなひ俗ーばうめば茉子乃衣懐
なるべーて又うおばーて二至二分をも用りり

○政明秀堂の喪よ

きたんうもうひ　望春子
かくやもむもうにてそつく

○弘民逝もて位一位たな大臣の官と贈られけり

時りよめる　義稙朝臣

○父がおひてよめる　忠考

ふたうもうたいはひ人　春
なうたまのをそりぬる

○母がなひてよめる　紀恵生

神無月おくれ染ぬる
そをわひ人乃なみだの雨

○母が一周忌によめる　　兼好

　絶えうわが袖にも秋はきにけりなほ
　　あるものをみだによそとをきうつる

○親のこと忌にて籠りをりかねさすがに花
　かごりお移ろふ時のハなごりけん

○そのおきりの院うれさ物語くこと
○新葉集よ新勅選うたりけるとき
で雑歌の儀すでありけるに
　大納言実為よたまはせけん
　　な村上院御製

今日よ初りてそうもとうそ
　ああめもおそ
返ー
　ああめもおそもそもとうそ
　そふこそうに
○同集よ妹まこ関史宮身隠うてほこ年の船い
まにそごりけるにまこ村上院乃高船をた
りうもひつげ給けるに
　右大将長親
　乃こ物まそもあるこうに
　こへ又いうたそうもうもうもの

○其の翰林學士權中納言伯夷十六の時より父篁
にをくれ母伯父乃あつきとも
ぞてきうびに爭をかのこたづのゆきしゝの庵をそでにく
らひてみしうき憂仲すゝきてせ我の父をとむれ
めとそゞくこゝろ悲をとゞりてみれめ母伯父をとき
つゝて叔をわり父は舅岡とりてまよわさめ葬れ
岡をとめふ八中にうこてて父をはうむりよりつ一日
かり物わる中ま父あるく

拔擢を蒙恩涙を雨
員へ去日加場上

生國し奢死則寺
とゝ約と領じみさ春忠し小西原
こをの服をりこ庵の岡とらぐ色合ひけふ
とうん

○そこ一共書碧が父の婦及と若ひ小西原
乃松面をの碧が父乃別心と小濱よまし松原のたの
に二義とすてざかんうらいて不浪よわずし給う
源義朝の云ひ命ありとそて父の首とうし春ま
右馬乃三ざふわこと申しま二統紀よ殘ろ
○父祖乃死恨命なろ時よ仕ざろ八西地住ろ稽地

兄弟子の論地なく互に譲り合ふべし
大高乃木さまざまなるを要て植べし
○石橋がよく強すの木多し金日樟に似たり
○虎杖は父母の親いあるを以て武田信玄父信虎を追
出して甲斐國をぬすみ取しがごとく天子の御
をぬぐらんその子孫乃行末のほどやふまりゆくべし
て天子をとかくさけ嫌ふ者ハ皆逆賊の扱ひ称号
とかくさけ嫌ふ者ハ皆逆賊の扱ひ称号
追おれていとゝ行末ひろがらず

△君臣の義ハ天地ありて動乃巣窟の穴まで
さりありぬいんやくとそ
と元后とすら天の命なるに設を紂ぞうも
くてくれさそげーたずありぬれば
四方乃海百姓萬民みな
なりてもの〳〵君乃恩ハ
父母ぞうの嫌まりくおほんの命あたふ
ムざうも天下をとぐをめ
の恩とまもるを者けり國をひきあて設ようの
ごとく紂ぞうも父母の子民を

天皇の徳をあげて天下をしたがへ
仲尼憲章の文武を一にし孝悌の
ひろきこと舜禹の善也この
ゆゑんをくはしくえがきて
ていてつ民ろをめぐみ
財梁の恵をすゝめ
き老周を聡明の徳
むかしをいだすや
よ八周の世をおさまるまでを
ふくおよそ篇の首尾

劔を以て向ふ八十禍津日を殺し
玉八曲玉なる心を表し劔と鏡と
窮極ともまもると天下統治の
まして神勅
なろべしと宝祚の
とゐます 我ところがごとくして同級よいつこまでも
一家族のごとく事あれバ
天の岩戸ハ
沸氣とうつりをも焼きうしなひ
代々神勅ハ
まもるの第十二代景行天皇の御子
也十餘人ある
雲劔ハ
一をもちゐて大神よりの
私ちらの尾より劔あらハれ
あめのむらくもの名ハ
し崇神天皇天日一箇神と

十代崇神天皇神威をもて
乃治まりて
ひ神代よりつたハりし
まもるの第十二代景行天皇の御子
也十餘人ある
雲劔ハ
一をもちゐて大神よりの
私ちらの尾より劔あらハれ
あめのむらくもの名ハ
し崇神天皇天日一箇神と

御身のまもりとしおひ神代のまゝつたへ
給ふ劔の御名は二代宗の天皇の御時東
夷そむきそこゝば日本武尊を征伐
つかはさるゝ時尊宮より給ふ御劔と
ぎ澄ましかゝる時に及びて
こゝのさんとしたる劔とぬきかへ
給へる事ゆへなくて
しばさしもあるを名を
劔と改給ふ時より伊勢宮
もう劔と尾張國熱田社
霜永乃乱よ安徳帝
同一箇神乃つくらせ給
たゝさわりておはす八坂瓊之曲玉八伊勢
多天明玉神乃ほりしおはす八坂瓊
地乃宮て曲とゝをなるもがさちとぞ神代乃八玉
分のうゞもとすとゝんさ
あひとさつけりおるべし
ゆへは者やさくとゝ
むとゝもあとさゝを同八
玉あり

朴なるまこと将の美にくらべゆ
ゑ葦原乃ちいほあきつしまなる
とよあしはらのみづほのくにを
あきらかくこの葉幸ましまし
なむ（一字ミセケチ）ゐ給ひしゆゑなるを
（知仁勇）ちじんゆうの三徳を天下の
得ん和らぎむつびまうでこ氣稟ふかくそよ
乃人まふでいでてうたひ中ふ乃人学びて統一
下ふれ人学びし三代のはまるべくも
あめ乃公家乃国政叡智乃伊川語撰集海

唐までありける漢の張良が黄石公乃部落
をこゝ徳よりぬけ出てやあらん我朝の楠多門兵
衛八孔明乃ごとき人ぞあるべし
と云ふ中庸をうこゝろ
○八卦の人数をうりうりてそ乃一
と卦ごとに物ごとを八よりうつ
れば一回三四章とたてくこの兵をまもりを章句
たゞうたゞそむ徳よりあれ西ふけまへうく
夜で動そうくたうふりの
きうりされこ毎兵は章

接近兵隊ほのおおこりてあとをおひ
ども」おそれ義朝はそをきらず
とかくつまごころ
○八陣を九軍ありむかしは黄帝一井田のさだめ
兵をもちそのほかはよりそひ
く守りて営制そのうちハとりひしてれを
りひたまいろハその周とくしなおもうそ
○風后の握奇経こそ黄帝よりつたへ
兵器楽歌韓信池魚の
ん七陣文字の若古なる

ふてあるをとりまきて来久家物ともうちされどお
や朱子候孔経傳もこれをわろ
○朱子八人蒙季通八物識大将の人なるを
よく八陣よ通して当祝とつくまで古今の物をお
くをうけうまて八孫呉にそなる
○孫子が九地の死地六将の服たらざれば
あたはさうそ八陣をまうしてもんり
韓信の背水我朝義経の鵯越孫子が九地
せりというべし
○むかし吉備の名臣八陣八陣孫子の九地

乃ち左つぎへまわりて手綱よりの
がられ、續日本紀より乃ち
○參ると筆井田乃ち
つの舞をゆへよきそ
ふ日へすゝ多くでござる
ひとかんの学もと出
ひとたて今よとこるべきことをあり
つけ連てそのあるさ
ひをりくそのへて奏しられをてこと
こふ乃ち陪しの高氏の称がそのまゆへ
そつをたりてそのまゆへ
む或ハ井田いのゝへの
あゝべつべとつゝのへ
ましにをみるべし
ようそあるとも今と
をそんよなまのあん
方井田乃ちおまりよかあ
愛至於道と云
海養乃社会の住とり
いゝ地下もうにさ

○維摩の神門甚だ廣く民乃至無量なりと云ふ如
つて三等こうさうのひまうそうなるものがりく
よのがりく
そこれ廣よのがりそれいろみりり河
たとへの海といわみそひよ々り
と翔じ給ふされど御方乃衣含うそう文宝
ふ月ひげの生りねすでよ國とたる見ゆ
うり宝とわ〳〵たみ衣含をもんとのそ
らつじもれのり給びえ又とそ勢して天下ちあ
てまりくる迎書乃神門も宝夜と昵

給ひて民乃くりとと云ふめりし衛の
よも皆私よ衣とねぐしく
ものくつもなるべし
○推古天皇廿七年の秋
ほくとの后いまして二親をわがせり乃みになり父
天乃り故よ天ふちくがふ君の日なを
故よ云よ云くつを忠と
故に云よ云くつを忠と
ひふりりて故よ云くつを忠と
ひふりりて故よ云くつを忠と
ひふりりて故

この道よさうなりのと大福と滅どめの精進
と水よへらかごとしわさて星と八義とろづく春
憐忠仁礼義智信と天地日月星殿堂照
神祇八倫へになんずるおのり春とあげて栄
祥とたび礼儀とてめく分とたつることめぐ
山友は八義よおごくへて爵位と剣をあい天地冠
と一とんだ思ひ日ふり添冠とこんだ仁月るん縁冠
とこんだ憐ハ星ふり縄冠と四す義ハ夜なり
紙冠とんだ礼ハ星也添冠と六んだ智ハ賞ふり後
孫とセんだ信ハ神ふり添縁とハんだ祇ハ祇ふり後縁

と九んだ後ハ母ふり黄冠とすんだ自今ハなく、
恒式んだべし号毒事記よおろう五の春縁乃
統今のおよハ九てどさりも八唐礼おりことなる
先秦乃経ふりつるやうて経ふ春経縁ふ
○古哥ろ

雪乃海七川乃乃らもりからこれの
浦代そ花さまろくめふりろ
代とたさ免民とわ わしまとわろ
あろつの嗣乃すふもかろし

ちごのごとく　伊勢家世あやしうて産たる
ゆえてそげそなかい腹くだりて天皇の田が宝
とうめうてうこうひいろ　ちごのさけのおかん　ぬかり
ようづけ給ふ何よ奏酒名物なりしが天皇をみしし
をんこめよ琴をひきけり天皇ゆるして面と
ゆるせその琴の音ふわづらに事出腹とこ
がつうまま奏がおよしびあ亜バくて周公
てけりべき去ありつべく今もあやうあて来
こやとのようとうて
○人倫二練〳〵てきごうれなるべし〳〵と今年文

あり二練といこ度いさひとみなおくびに出
今てかつていさむるとつて
世にまれなるおとうべし
○司馬温公幼年縁の人と史魚が屍練のごとき
前公よおこられ書よいそあ
つて君の為とすのこにおいて
つて素中活のべきを義どもてなるようこそ
志あべし
○漢の孔光孔子四世の孫なり若うありやまち
とありしてや亜とこのひ人倫ありとなりひ

人をあげていふことをそうろう完了
書きつかうまつりて朝廷に奉
人遠き省中の樹いかのまぞとひふれ給
してもてこしざりしそのもの
○下公い須臾が將ちうる程の
ちぐきこころざる程のこと
かうびてて公さたり賜ふ
うへに居して君よ天下
ほの人の言をきて見よおら
つかよきわり朝の権
乃君にわよいざろうや
○天皇乃位置ひよ光仁の
第四の皇子と御母
一死一ぬるとをくい遠きの紀伝
元四年とれあど初位
○漢の王陵が母今をすて
○漢乃王陵が母も又陳
のちの世よあげし都
のちの世よあげし都しかりけるさうもの

打ち死なり
○楚國の將子發と
つきて古卒萩と升分
しぬ大ひに奏とやぶりその母に
いまだ人にせめくいはく越王句踐入
將ましきびやう酒一器をたまふものまことに
とにのよくそこをまもれとのまゝ
一戰をもとみわらや今ぬきして士卒
まめとそひらにひとり兵食ひ
ふくくひてのちふ入
○淳于髠乃ち
もまでかへてかつもすま
愛すかりち市中に
淳髠と縛ぬ
○崔杼齊乃ち
おう君乃ち
よく戰とうなり御者

てわやうくんとてふ不孝ものゝ義うゆうあるまじ私ありわけはつねのゆきたうひろかふ腹病ものをわるまて氣よハなうりの也まみのそうんごーとたてその氣をそこなふてよくたいやうこうり

○扇の子で添と信州切腹の事歟ようまこ信事やぶまそのあとも腹と村らまてうべ涙迫もも堪とうし我頼うそうふうの生鎖うそん

どふこのうあさに自害のはたまりハめとやけまハ生ち力と扱ようまこ信事やぶまそのあとも腹と村らまてうべ涙迫もも堪とうし我頼うそうふうの生鎖うそん

つねれうもそのあとの前ぐれて大勢の中とまぐれ出て石にてつもわせう治川乃うさ和よ流めてばまハ大波雑よてて頼実指の時も乃こばろとゝふまこ信の石はよ前およ我道をあんじゃくびにかけていづくそもりくえめの和よかしおさめよとや紂とうけくおよ約一生もの為乃右我まそ志ひ処やもさふゆうんと幹ふ行しておけごろもに

こそこ二位のそとをひおてこ
をた我を我をるまふとそ
ぼ○今れど今掃管の中に
○黄ろの初給う素の武
人をそう殉一先そ
の何百七年七人ゐてこ
主我狄の倍ちを出そ
こるく穂こうこれと
とてこ良のまこぐ祝
と用ふつきし池を

宮居まてびて工匠いきなぐ墓の中に納そ
あやしめきまやとの今なお
陵主一位にをぐど妻仁寿
死よまてこがりむる事孫
ようわま伺ぞまこぐんと
孫おそ公園の主神を百人ぐ
好この超のくちをほうそ人属及び
世のほよせんとの事大
ち祖をたてこんをそこあ
ぬ宮祢礼とおわうや

（一）藤次信高が葉擬古筆共二の初ふ殉葬のつゝまり
きまを綴ぢそとにあり其一ふまのまゝひあり
らわゝきまう（ふん世乃伯擬乃人ハ
よ伯ごとくふまゝ一ハまゝひをつゝ
まつゝきうゐゝきをもそこふ
（二）殉葬ハ脇を切俗ゐを逆脇といふまやうハ
をひゞそこゝろの奇人のうふ
ゞにそ人をあるとゝをむ
いふのあるを俗ハ兄弟

ハ命ずるに我死をバ
乃姪ふをすゝまゝをゝさ海
殉葬ハ抱れありとてめ
ふの心ゑるまハ精さ
ゝしむとを不仁とわさま
乃そをめゝて寝ゐよ
ものあるをひゝをあもよ
ゝと義ふよあゞ孝孫ゞゝ
のためゞゞさゝゞめんや
こ復すべゝ春ふの親よ

ゐし元の死よまでこゝろを用ひまもりつゝ俗乃そむりとひこをおたまへ

父母のうへを泣まうしおもふやう

○陸子東死しその妻そのまゝ病臥のたのよとて殉葬をねがひ出元これ忠孝のありようにて旌表乃ため奏聞乃事とゝ

志ろんひありようもその事止め

○平右府信西の難に逢て時私財を平め方〻へ

ゑまが切腹して死ぬるに元にまごころの至れゞ也

○前朝秦の始皇の神とうとたゝえまつり

ふゆけがらへをしさとてのがれ給ひ風こりのやまら也そこにてそとうしろ

表にげうまぬれ〳〵幸再度上の居ゐ形とうとめえざるぶりそうこう魯句

淵を綾ござると行と強淵のはいこと翁

あのをうそうることをれ
そうつと量份ハをそく鋤と
うとそのあをを絶滅するで一秦の舞陽と軒よそひが勢
よの威よそのひて周へさくおひびく發め
ありしがくれくしてあつ
のこまにつらの名よう
いこれるで礼よ学
この人しをおさらく練
れいお練てそいよ事よ
の易血乱の易のこ

刑

○漢の發子陵で事をこれあをたるぞれり事奉
う漢とそごうと劉氏こ
八分編也周よあると市井の居
奉ればこう辛古の漢し王后おあごなけ
ばへ漢民の雛よあるば
むりのようなどこ陵す
つまのけの伊乃あるそ
わるう生てたをけざる
をび越と稼ぎ花鬱がおるうよびをまそや

△神ながら二伊弉冉尊天神より
瓊戈とこばの破駄盧鴻よごつも神くら天の
浮橋とめぐりみこのまくくえしなひりこうく乃
りみをうとくく滴ぐとたのこしめたまひ
まひ矛くの岡のしほを百姓ゆさうたる天照
太神二そのみつよてまし而を伊弉冉尊
心乃御柱ハ一そのめぐりまひ天の
四寸たけ八尋殿の行りハ廻して作り八色のさ
ねよてつくを八重榊まそかざりをそれてとり
ていろいろさまざまやもろこしよりかく

(一)高皇産霊ハ天照大神乃第二くまりこを
けしおもこの子国勢之ハしらと対考記
と記紀とあり中に猶乃甘ぜとを悪くあけ
その御ハ神ぞのくなすさのをやと宮柱
太敷やそ百ハ国神より名い脚摩乳毒の名ハ
手摩乳このをとめいやつまがみの名ハ稲田姫
こゝよ八ちのれをあおち大蛇乃
まれて今こうをとめよものごとにうてい
となげさむしこゝそをしめをとくまんや
とのたまふ尤こゝのまんとを

そうたしかに稲田姫を御髪のなかに挿して、
乳を搾り乳そして八入の酒とかもし終えると、
ぴったりの酒桶によって、
垣をめぐらせてそこに八つの門を設け、
一つ一つの門ごとに八つの仮屋を作り、
その仮屋ごとに一つずつ桟敷を向かい合わせて置き、
その桟敷ごとに酒桶を置いて、
その酒桶ごとにそれぞれ八塩の酒を盛り入れて待ち受けるこれ神剣をもって、
その蛇をずたずたに切り散らしたところ、
肥河が血で染まって流れた。

をのみめくらは流れてこうとそこにあるをたてに、
まちうけ、
八つ目をさしつらぬき、
やくうちにその八つ目ある蛇は、
となげめたまうり首二十一字のくびめり三
のうち神一ちうとすねは二ばかりにごりてよ
むべーそで先拓いまざあれば陽ろうてすこね
拓とそでよりてへ流ろうあれいにごりてうひなる
元なりうち弥学ちゃ仏記よ
日も堂めいくさ

あるひやまとたけるのみこと
名倭姫命に御杖代と
事へ給ひし御代に
なるれば
(一)豫て将軍八大照古神に
祈誓して
花開耶姫と
孫瓊瓊杵尊
をめでまつりて
うたひ給ひしより
みまで

われらは
あるひは
よろこびまつりよ
(二)もろもろの伏義は
今てまつりしがはじめ
ひら神農黄帝
礼となんでなまはげ
たまひて
おひて
まのをはじめ

まて周の世にいたりて孝畑こが徳うたえて婦
人のみちにかなひしに紂その色をこのみ
妲己をこのみ給ひて殷の代うしなひぬ
もと夏殷の代うつりし周の代のはじめ
わらはの歌ゆゑにやうやう衰へ
人倫のみちまでうつりてかくれもなき
ありさまをみるにつけてもいにしへ
しのびさまうり
○かくて同姓とめとりさだめ事
まことにかなりそめありまして支姻の別

自然のうちに男女の欲よりて
ゆへなどをたよりてこれやまことに
ありさまありうるべき元服の時は同姓とめとり
とも娶ともろくと世史記にかなへり
○女よめとりて家のこと乱れのみ世に刑人あり
家ふたつ世に悪疾あり孝敬のみ父をうしなひ
婦ようやまひあるを父母ありてみづからやしなひ
ふたりの舅にまみえ悪疾あるをかしづき
ありて養ひありて孝敬ありてよめのつとめ
よめのつとめありて家ふたつ世に

もふとこたくなの亜二ばかりざゐなたもそ話男
女のまゐりとくおん婚姻のちゐめをたりんで
なまふる日聖人のをもとうまめきこと悪わ
ふとい婦の飛ありわれいでとうこう
ひしおまでかぐこれたえうるなまふりふたりべうざ
まびやむことをえぐこれてゆ。
られわるん人物よりうはちとそ婚とい女の汗きり
しまうやわるひい妻よみあくべ書よまあくとくさう
ぐしもわりるむふ解よ悪わるとばれ言
よといてやりんく。ふふなりありと思ふ

○夫死て再び婚をばうハ婦の乞うまを
失ふ者と嫁婦といふ婚姻とばめとうべくばる是
婚姻まぐうてたのむことうといふ再び娶すべ
やといふ事をうのいふ大事ありと祖よのいまも
しゑんあるを

○婚のうげふんて富をとろものと妻娶の音
娘とう嫁婦の和人の入婚と楊肝吏とうふおの
こうるのさそとかうふりんりや俵結

○書こばうこまぐこまうてやりるひぐにとひ

てうへ　とうこと祖父(おじ)などに仰(あふ)ぎ尊(たふと)び給(たま)ふ貌永(ぼうえい)その事
母(はゝ)に告(つげ)て物(もの)と叱(しか)らるゝをも厭(いと)ひ給(たま)ふ事(こと)なくおせ〳〵と祖母(そぼ)を
わらはせ給(たま)ひなくなり給(たま)ひしかば貌永(ぼうえい)のこの小事(こまごと)ふるまひの
ありとつゝしみ思(おも)ひ給(たま)ふ事(こと)なりしも貌永(ぼうえい)ぐん
なるべし

○萬葉(まんえう)は七歩(しちほ)の例(れい)とのせて三一傑(さんいつけつ)をうたひ
とべし七歩(しちほ)のうちにやをとつゝの後(のち)一首(いつしゆ)
○ひゞいるうつくしひけしきに井(ゐ)なかに
いでゝおそひくるが花(はな)ありと男(おとこ)この女(をんな)をそ
云(いひ)かけしかば女(をんな)はしらぬやのわ

とゝれどもさうぞうんありけるの哥(うた)などおひうつ
に井(ゐ)をおくわひよそりてごろあるかと
小男(こおとこ)うらのくにさやとの新(にひ)よいさうおい
でさにゝりさもゝれどかの女(をんな)あとなへふけ
ーれもゝうれで男(おとこ)あゝありてかゝあ
やとうこゝひてせんざいの井(ゐ)よせれてから
らへいあゝかて兄(あに)ぢの妻(つま)ちおゞめく
風(ふう)ふけも奥(おく)住(すみ)ゐ山(やま)
私(わたし)まや君(きみ)ひとりこゆうん
とうをけるをゝてかぶりうとゝへてから

らんをいうにそりおろし伊勢おをかうくわんわり
けり風吹ハ辛き面山とそんとそ奥ほをとなす
とつゞけ泥らといんとて奥ほ泥とつゞけ
なせんけつとをけっありぬそとくなこーとこと
いうとがねとくんの事といひごとて桃園とかんてこう
うと頭昭の短すると宮都をて寝をつれり歌の
あるハ風波えげしひ河よたりつきまんかんかん
そとてきことひとりゆくまりありしまをしまの
道をこ答ハ枡よんたりかハ世いたのそがなり
おやハのかとれどとそそのひめるはやつきこ

まるまでて神こめうんうさいわうれむべきさ也
○元明帝の洪河よやまとよ果安やふも答
友にてきこと人感じつしめりそ乃書閑ねり
存りとてきをり果安ぞとまりとの
ご子妾ごをに八人ありーをでやりあてきも
となるまなく閑ねをつがなりにいめく
婦乃礼をつしけまべ河門さめてそ客
答をあるりぞよ
○穆徳帝ハ江河よ對馬洛乃家女ぞてあ
るうをあるためごそ乃父をまこ死け並ぶ墓ち

かくて后とわり春秋のてつゝを乃ちゆくへ
まそも歳じわりの沖門をまつめてそ乃門園よ
わつてなまみ
○光仁帝の沖河よ三波路のなかぐーそとそ乃
寿年十久乃りしがんじつらひてあつためぬ
をばしま乃墓に侍ずの末子生乃ばしてこ子奈
年をたゝぐりけまべそれ田租とわぐゆつの
○淳和帝のい河よ志陸国乃なかぐーが年久
わて国郷乃なまみぐーよゆいて吏乃妻ほよ
そのそゝとはくびわさタつわつこてわぐーと

かまるてあ沖門きつめてそ乃田租とゆ
るして真節とわらりあつふぐーがわて
○建礼門院の右京大夫が三位中将惟盛ご百に
いうにきん我つほの世をきそてまおを
むつーのそ乃
こよめつを
○れとこ乃人のまよまろわつ乃に女にわくかやま
ひをてゝてよわくわめよける時り
衣うをそにさわくわくもまもも

あさ庵よ初ものんさうそうめん
とこの句をきて身まうりみけり
○百府(ももづく)の歌(とこ)ふみ(ぐ)書(め)をよそ(ろ)ひ船(ふね)のをのよそほ(ひ)
書なでうりて文(ふみ)とでいうせおひくらべたも
けりとあさづいんやまの秋(あき)のそたがん
今ぢんろこあつまを化(ば)日(け)をまちたなまへこよみ
酒(さけ)としてゆきの白書(はくしょ)せおがれくはかりにつき
つま夫(それ)よりてつまてなげきこころ里(さと)ばたちまち秋(あき)の
ま、こゝろおりてのりて酒(さけ)よゆくまいまぐこそあり

乃秋(のあき)とりくろうよあのひとまふこう舞(まい)風(ふう)よい
うろく松(まつ)よ松(まつ)ちとなる年(とし)
○漢(かん)乃楽(らくやう)羊(ひつじ)よ(ぐ)書(しょ)許(ばか)仕(つかまつ)り(ぐ)
しく叙(つづ)よ彩(さい)ろ蘇(そ)の玄文(げんぶん)乗(のり)(ぐ)書(しょ)鄭文(ていぶん)(ぐ)書(しょ)
職(しょく)よをうされてて水(みづ)よ我(わ)乃(の)涙(なみだ)波(なみ)
(ぐ)書(しょ)も尭(ぎょう)をまうりもてこゝろ(ぐ)楽(がく)(ぐ)書(しょ)な
どいなでめもけ(ぐ)されり(ぐ)涙(なみだ)波(なみ)(ぐ)書(しょ)ふたゝび
いけ(ぐ)れやうよ盛衰(せいすい)記(き)まけう(ぐ)ーまるあり
りの小(を)気(け)もまこ(ぐ)ば対(つい)も(ぐ)ば伝(つた)のあや
まるもそやあん心(こゝろ)地(ち)乃悪(あし)ねの悪(あし)ねけ

が前をうづこゝろうりとつま
○楚王息を伐てそのつまを
らしめそのつま人を妻とせんとせ
おもてあそびしに妻人息の志をみこゝろ
らびて一たびわかれをいでゝまん妄たびく
を君とつねどもてして後ひよりまんかれて
よめらんやまんやとて自害しけり息のこゝろ
た自殺しぬ楚王是をとりて祭候の礼を
てあり勢はうまれ
○漢の南陽の張瑜人物
名の乗ものとう〳〵乗ものとう〳〵さよ釈の妻
婦をめんとおもひて家よめてきり同釈の郭
妻をうまとうなりが妻そよめわらんと約し
病をかこてしとひくびくれば釈とみうよ
してかうそづうちひ釈その釈とうぐひう
去め車にこのをて郭氏がりくけるに
乗よろこりをてそれ陰氏と同穴はと
釈ぐひてそのぎそげてすべきやうりる
しとて門とそこ妻と結ひうぐり妻と結
入て拘ごつまやまびしくれば妻そうてせまり

ごづびかつてうちかわけぬ桑のわんと
宝よ入れよし扉入よて戸を閉しき書けっご人
ひうんとをそりそやな法の字いまでこそこのごと
してくびつをおーそをも

○胡漢の光武帝のおの○胡陽そもやどうめ也わ
ふ時光武ともに朋友と綿てもろみてまてふ
ろも飛后の中大司空宋弘よとうぶりの方とと
もにを光武ろ主と屏風ろうけよ生ぜ玉あて宋
弘よとく成て御ごりとくんそ書とうふ人
情ろ一生宋弘貧賤の時のまごりりつべし

の書堂をもうでとまえ武ごとまりかつ
○漢の朱買臣は呉國の人今の蘇州の書を見べう
前とにうひ書ってでそこのゆくこれ書ってそこ
それそ一生みてもひべ今をでよ学にあうら
ねんごろむしこのさ我がをまんとまそこいよ
書いりそこうごとれ漢の帝にうえちんとこと
いう買臣をゆうしてむそれら買臣
敬服すめくをもろ帝

きにて御ふたりにてしばらく物をうて
やしもそれもうんとうり買ほ若い衆
ゆいく異乃さうのよへねも
うりに跡とおさむ買た妓の書史を
のきて寺乃今にてこうが
書うびりくてくれ方綠志秋買屋が留よ
天十年前お妻
花書君ふ憲二
玄警右寺脇
方位納書不
金日
員久

と記しくの書乃墓うり
青菜也一故丘
千年地骨
丁寧婦付
自右糟糠合到臥
と記しけうり二首うたが
ござて買居ちめかにくをさせでそれ会
ひよわくでや
◯教乃関を献らるそ乃子法家姓名とうの事
呂乃右史家乃庸夫とた史が女つの

人よわ〳〵だとおもひてさう
國よりくそのゝ女をまへ
糠の書をもそらよりて
む白馬生もやもひとそ
○晉の趙衰が妻い文公の
もとで允文趙衰と
二世叔隗季隗と入れ
よめわらせて有とうひほ文公國よりかへりてそれ
ひとめ趙姫と趙衰よ
が狄よそのことを安て

かへりてまもひけり趙衰姫
て薦をわるい義
貴の在よりて
ふい狄の山ニのりめう
つるふもへめく有と
そざら狄叔隗を内
とかや
○漢の成帝班倢伃
つもそれが倢伃
へ名ハかさりふの

仕う今民籬せんとのなりまをとこに似いりん
といふ事ぞそれをうつしたる止む
○衛の霊王の妻は女丈夫にて常に男の衣服を着たりと云ふ妻も夫人なりつふふとわらひをまねく人皆君の母人のようで爺うでは我ながら袴をはきてゐるゆゑ今さいはるるとてまりて節とつくをとりそろへ納ぐつくをかぶり弁よく出来付きまくあひそんなとの人りけも悪ひ悪ひとそこらの時もまく春より日をとりむ仕ぞ妻がとこをとかがやく仕んやうにおもざをこかがやく仕んや夫人皆老の母をつれを袴とた

らびとりんだ袴ぐつくをかぶりとくそのまよいらくとそこらの妻おさむるは妙なり今夫人の分よりおくし遅ふしたる遅なりてもあんとう夫人やうにそれとろくそれ仕うそ
○宋の母ふかい鮑薗う書ふりかうまつしめり鮑薗衛ようにふこと母うふはは母うものようそのをうとともひ弁書よとふが如仕のぞさうばうとの

わこのさいかんことをよまをとそでにうこまするあわ
とこたゝ母家姆人ハ一人
をうとにおそうびひまて嫁をぼうをうとん妻
よ悉ともろうにもうとせんや稚の主まる
十二人紘侯ハ九人卿大夫ハ二人なり我が
とうとい士なりよろうあるまひべきやぬ人を
ほらうみらとありてさるをハ一をもつ七もの中
孫たゝめうをそゞめとんの袴をうへ家
とてらうことをもうむろやこそ始よてうこと
いゝめうしおう寒の衣やそ悩うわう

とう勢つを
㊀漢の書壽が妻名ハ昭字ハ恵姫といふ班彪が
女にて兄ハ固ハ班超ハ昭ハ曹大家と號し幼より
くまなひて古今をあきらめり毎物よく度ありしや
入て皇后貴人の師となり帝常に
納言とてそうり恭
いつも
㊁大明の高皇后そうの徳四衆にて初事をこの
めり女史の傳の要をとり后の黄色のまと編ずるを
ゆうていうんとうたに黄色の光のごとくなり仁をたち

義ことてく善悪よりの
のら仁義ゝまもりて仁義ゝすて善悪ありんや
仁義いふことわくさしらふ
ふいはりあくざふたるもいふの又小学生
とをもてさとり在をくをこなひやそ〳〵人のこ
ちそふかまりまこと
ふとあうたなまくざはやや参〳〵生
いやもかゝもゝ人今ゞ我この学をあけ
も婦女をてもそ
なりへまりんとを

△身は親の枝よて
人なりけるば親
ひをそうゝ我めぐむもろなこのを
なゝ兄ちまゝあ
わさらゝあくなをそうなふこれ
かゝ親父母のまをやゝなひそくゝ
ゝろとをゝろとをばそぐをつゝめろちぐろ
などわけまそそあん
○わ私乃句まうけるとれりよ
免ふ

せをけいふうてうてうくんうり
○わうれをぞうちうをたまき
○うちうとのあまうりふけう時より兄弟の
なうあうとあうをあむうまうとのは
ゑまうりなかへとりんうも売うに
門人楊後がつくわう仮礼帯解より兄弟の
子の姪小功とありおほうてゑや兄弟乃姪
うりをう乃服といそびまう決たるうりや或ハ叔

のうけうそうや
○おうとうりくとうをへまうとうる
他人乃年よるう人ゑとけ
とれうそそれくの袖乃つるでとみざるめと
なのくけうあをうち乃着ゑ乃兄弟のらうも春秋の兄
とうをハ当室が人ゑんとそうとしてもそうり
そうふる乃袖をきうざうがたのかまとうまをの
衣裳ぬよかうかうあるまで衣着乃兄ちの
れ初へなるもうとうまるとうをうまうゑ乃ゑーみあう
屋し

○ 本朝崇神帝の御代に
始めて長初乃唐土を
帝一の花ひらかんとて
大和奏舟大唄乃まし
ならべ
○ 古歌より
越て幼人とは
ゆう分いろを
竹のやもれ乃
とかうく人なれ

△仁義礼智八人乃住ひ
はよもつぐひ君臣父子乃親八仁
ひ吏姉の別八智乃住
礼乃はゝよもつぐひ朋友
八の兄弟先生
すから仁義礼智乃
乃あるにおゐてそのまゝ
きらめあるひろうかゞ
まべそしまむ

五倫の友は天約の五倫と氣こゝろざしこゝろざしこゝろざしこ

ゑて飛そのさとやまのたてそうまあや
まちわまバ神鳥がとりけてなごとたづ
けるとぞ

○国義叔榊翁の今たり」時歌もまの初年そのの
昭くとりくるとにうこまとよ海そほーそこわ
つまバ義叔之死あそれのためよ云仏乃人と
云物年日くよそのの経を学二年みてめあ
ゑ初年幸せる時そのまいけな義叔そ喪
ことものてこれとそうりそのよ結集て
始終とこれるてみりし

○仏牙のまごのハ経よ勅ので学志ろまち
一日朝そてのちハ仏牙ことみそたち高
ふそびもりざりけ同心乃ものなけまバりや
先同心乃ものと勅ので学志ろまち

○人ひもとものをりくとのるひ仏まこ
どそれこと紫乃香まあ降ざめぶめく
なつわらび出橋

○古今

いめ一色乃ま雨を海人とも
ふそをかふる人そまる

よろこぶことをかぎりなくそのかたちを
見るにしたがひてうつくしうをかしうを見うけそ
わうらうさに人のまことをうしなはさるやうにと
人のあしきことをいましめわろきをあらためよ
善をふかにこころをたまてとのしく
なふらは衰をまねくいはんやまして驕ほこり
小車うくるさひはなうらはなうらはなけつ
ましわうはなうらはなけつ
○衰ひつこと○一年九月二月三月ありて
斬衰斉衰大功小功緦麻あり斬ハ不縫也ざん

さいさいさめくあるこそわのそ剣しそた
らめとわうど斉ハ縫也さいさいそうつさまあう
さくねうそそうとわか大功ハやうあれぬのを称
つてそらのか功ハやうあれぬのとりらめ
あるもこむ功ハ大小ありあうゆよ大功小功
といふ大功ハせうこハうこ九よみ小功ハすうこ十二よ
見あり緦麻いさいさめくうのそくるう初の
ぬのとりらめ緦ハ縁也すそうこ也おうそうそ見
なふこと衰といひ下と衰とハ斉也うう
しこさこふおうそ服行ゆへまくい西

ちうに斬奇の二字をもつてくまなくさらひ出すなどひざりのしひかうく服のくろをもつて喪といふ心ふかくもつよく員版をもつて功認よくこれをつけどもくこころをおよびて報ぎんさいにこれをいにこれのごとくに拙しあるをもつて九月のもとに服小さうに父母のごとく服しおはりたまふべきをもつて親よい勢喪として父母よりさいを服しおはりたまふべきをもつて親よい勢喪として父母よりさいを服しおはりたまふべきをもつて親よい勢喪として父母よりさいを

えんよひこくそれぞまことに有閑（ひま）の孔子（こうし）
そけるかこくそれいざさんとうちあひ
こゝろおとりのあるごとやそれなり下（とう）も異（こと）の
かどおゐてそれと免（ゆる）をこゝまかんえ紙
をそれよそかりて師（し）の紙かあるごとみけま
ば人のえかんくまでこゝをそりく丘（きう）陵（りやう）の
大學行（だいがくぎやう）我補（わがまま）よ倫（くだ）じをれ